

広島俳句倶楽部

令和七年二月作品集

大山道(だいせんみち) 佐保 光俊

大山山頂の池に現れ、大山中腹の大山寺に祀られている地藏菩薩は、現世の苦しみから万物を救うとともに「利生水(りしやうすい)」を恵み、飲むものに延命をもたらすという。

平安時代、農耕の主力であつた牛馬にもその水を飲ませようと、西日本の各地から大勢の人が牛馬を連れて大山寺に集まり、それがやがて日本三大牛馬市の一つ大山牛馬市へと発展した。

大山寺から放射状に伸びる、参詣のための五つの古道の総称が「大山道(だいせんみち)」で、その一つ「横手道(よこてみち)」に繋がる岡山県からの道約百二十キロを、半年かけて歩いた。

道の起点は、私の家から歩いて数分の生石(おいし)橋。そこから足守川に沿って北上し、吉備高原を越え一旦、盆地に下りてから、大山道最大の難所である三坂(みさか)峠(標高七百メートル)へと向かう。峠を越えた道は、やがて次の鳥居峠に差し掛かり、そこで初めて大山が全容を現す。そこに立てられた神門(鳥居)から見る大山に息を呑む。ここから、いよいよ大山道はクライマックスを迎える。

道は、芒原の中を郷原(こうばら)集落へと下る。かつて、金や碗などを作つた本地(きん)師の村である。滋賀県にルーツを持つ本地師集団は、小椋あるいは岡井姓を名乗る。郷原漆器は、今も伝統工芸として守られている。岡山県側最後の集落、延助(のぶすけ)集落へとさらに下り、今は鳥取大学の研究林となつている樹林の中、川上地藏の立つ旭川の源頭を横切つて内海岬(うちみさき)を越え、鳥取県に入る。そして、大山山麓の、これがかつて本地師の村であつた下岐屋(さがりや)集落、御机(みつくえ)集落を経て、鍵掛(かぎかけ)峠を越え、大山寺へと向かう。山中の景色から一変して、日本海に伸びる多々浜半島が見えてくると、大山寺はもうすぐだ。

最盛期には、年間一万頭を越える牛馬が取引されたという大山牛馬市は、時代の流れの中、昭和十二年にその役割を終えた。

鳥居峠

神門に大山を見よ紅葉濃し

郷原

いくつかの墓は小椋と時雨れけり

延助にて

次はもう伯耆の村か柿赤し

川上地藏

湧水はいま冬の水古道来て

内海岬

初冬の伯耆へと突く杖の音

下岐屋

ここはもう大山の裾大根懸け

踏み落とす峠の石の音冴ゆる

御机

ここもまた本地師の村や山眠る

裸木に日のあたりたる文殊堂

一ノ沢二ノ沢へ散り冬紅葉

大山の初雪にふれ横手道

小春日の多々浜見え古道終ふ

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

佐保先生の古道歩きの結果を、また一つ読ませていただいた。雄大な自然の中、古い集落を辿るたびに秋から冬へと季節が移ってゆく。私も大山道へとワープし、ともに歩いているような感覚になっていった。利生水を飲ませるため昔の人が牛馬を大山まで連れてきた道だということが作品の基底に流れている。句の力強さとともに深い余韻を味わった。

神門に大山を見よ紅葉濃し

紅葉の中、「大山を見よ」の言葉に一氣に鳥居峠に連れていかれる。

初冬の伯耆へと突く杖の音

山道を歩むのに、杖の助けを借りている。その杖を伯耆へ向かう確たる一歩として、力強く突くのだ。

踏み落とす峠の石の音冴ゆる

落ちてゆく石の音が冬の峠に響く。「踏み落とす」の言葉が作者の歩みの強さ、確かさを伝えてくれる。

大山の初雪にふれ横手道

雪が降るとなせ嬉しいのだろうか。それが初雪ならば、しかも大山の雪ならば……。

小春日の弓ヶ浜見え古道終ふ

鍵掛峠を越え、弓ヶ浜が見える。古道歩きを一つ終えた達成感を温かな日差が包んでいる。

《作品鑑賞》

亜矢

「大山道」は、まるで百年以上前に歩いている景なのではないかと思わせる程、大きな景の作品である。行く先々で出会ったあらゆる自然と人間の営みを尊ぶ作者の姿勢が、全十二句から素直に伝わってくる。難しい言い回しは一切なく、修飾語もないといっている。作者の人間性まで感じられる。

いくつかの墓は小椋と時雨れけり

郷原集落の木地師の墓。作者は丁寧にひとつずつ見ている。恐らく素朴な墓だろう。そこで時雨が降ってきた。いろんな歴史を経してきたであろう土地ではあるが、明るさを感じる時雨である。

踏み落とす峠の石の音冴ゆる

この峠には作者一人しかいないのか。はるか下に転がり落ちる石の音が寂しく、厳しい道のであることがわかる。丁寧に詠まれ、まさに目に見えるようである。

ここもまた木地師の村や山眠る

御机集落での句。作者は、いくつも木地師の村を通過してきたが、ここでもしみじみとした思いがこみあげてきている。かつては栄えた村だったろうに。

穂芒に日のある方へ帰りけり

藪山に短日の雲浮かびをり

手をかざし安芸の日を見る時雨かな

四五人が畑に出てをり小晦日

冬草や古道は分水界を越え

寒菊や道はたびたび行き止まり

訪ね来て国府跡の雪眩し

そよ風が国府跡の雪に吹き

国分寺跡へと畦の雪を踏む

裸木の美しきかな神の山

追ひかけて来しかさつきの耐鶴

どこまでも低き山なり冬の安芸

どの家も実南天ある峽の里

街道の地蔵に供ふ冬の菊

酒蔵を用つと貼紙花八手

歳晩の里に鳥声よく響き

遠くまで葉書を出しに二日かな

夕暮れて冬至の雨のやみにけり

山に沿ふ里は小雪か畑りたる

雪降つて止んでは降つてひと日過ぐ

鳥の来て山茶花の花散らしけり

目を瞑り聞く雨音や冬深む

寒の海朝日の道の筋伸びて

寒林に日の差してをり鳥の声

寒夕焼列成し帰る鴉かな

二分咲きの白梅に鳥騒ぎけり

春の風背中に受けて友を訪ふ

春の泥散らして子らの遊びけり

窓過る色とりどりの春の鳥

海に出る丸く大きな春の月

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

我が影を見ながら歩く小晦日
いつもより星のくつきり大晦日
二階より下りて礼者を子の迎ふ
川にゐる真つ白な鳥松の内
順番に声を出したる夜番かな
会釈して夜番の列を進ひ越せり
寒杵の通る裏道星一つ
いつもより歩幅を広げ冬うらら
寒風に背中を押され立ち止まる
放りたるパンにとびつく寒鴉

亜矢

時雨来て瀬戸に光と翳りあり
古里や狸三匹まろび来て
父の血が我を沸かすや阿波踊
そこここに掃くひと眉山眠りけり
句碑あまた冬の眉山を巡りけり
鞍の諸手に受くる錦竜水
勇ましくや親潮船はいま渦に
焼芋の湯気の吹つ飛ぶ鳴門かな
臘梅の未だこぼれぬ朝かな
臘梅の夕日の中に凍てにけり

綾乃

息白し犬が先ゆく上り坂
絵下山の鉄塔遠き冬霞
冬天に山から鴉来て鳴けり
牡蠣打の今日の牡蠣殻堆し
岩滝山の色を失ふ寒さかな
北風に向いて鴉の身じろがず
翳りたる絵下山すでに雪らしき
ことのほか静かな空に雪の降る
枝々の冬芽確かめ山巡る
春川の伝令めける小鷺かな

井藤希

勤務終へ家路たどれば冬の月

ことごと大根を炊く日曜日

クリスマスローズ一輪やつと咲く

水仙のただ一輪の香りたる

寒椿亡き兄のこと思ひけり

雪の朝靴と肉球跡並ぶ

春寒し鴉来て鳴くビルの上

病室のカーテン揺らす春の風

薄氷の池から鴨の飛び立ちぬ

うすらひの芹採る谷に風の吹く

大畑恵

風花や路地を抜ければ海が見え

海鳴りの時に高まり寒椿

街なかの宮に鈴振る寒日和

午後からは風吹きつゝのる葛湯かな

竹藪を遠回りして梅探る

登つては休んでは梅探りけり

待春の瀬音確かや谷伝ひ

鏡面にバレエの子らと春の雪

峡晴れて二階の窓へ梅の風

春めくや乾く暇なき花舗の床

暁子

谷底へ舞ひ上がつては木の葉散る

子と肩を組んで寄り合ふ初写真

左義長の煤がわが身のあちこちに

布団干す客去りし部屋広きかな

臘梅の花つく鶴手で追へり

退院の夫は山家へ雪掻きに

雪積もる山荘めがけ子らが行く

寒椿郷の垣根に咲き始む

笹鳴や我が行く道のすぐ傍で

竹林の葉擦れの音や春近し

すみれ

頂上に雪有りしかと問うてをり

水底に光のとどく薄氷

日輪の滲みてゐたり春の雪

一片は手の平に落つ春の雪

絶え間なく水の音して斑雪

倒木の上にももの芽見つけたり

草萌に当たらぬやうに杖を突く

向ひ掛くるやうに背ナより春の鳥

向き合うてやがて向き変へ春の鹿

囀に近寄れば皆飛び立てり

知佳子

裏山に餅搗の音響きけり

父親の声に令はせて餅を搗く

餅搗や令の手入れし祖母のこと

餅搗や赤子は奥で寝てをりぬ

幼子と階段数へ初詣

子の神籤読んで聞かせる初詣

年玉ですぐにジュースを買ひにけり

冬空の峠を越えて町へ出る

母が家の玄関の軒大氷柱

パンジーの鉢植を置く母の部屋

ちどり

転院の夫の被れる冬帽子

亜精髭の夫や窓に冬桜

雪催遠き山から消えてゆく

降る雪と融くる雪見る夫かな

鰯酒やどちらが先に死ぬのかと

冬木立長く伸びたる飛行機雲

姉妹みなどこか似てゐる福寿草

大寒の背ナに日あたる昼下がり

寒雀ドレミドレミと跳ねてをり

春泥や鳥の足跡吾の足跡

辻純江

六甲の山を歩いて帰り花

鴨と鯉上下になりて泳ぎをり

新聞の中に焼芋子の土産

日の差して歩を強めたる冬の道

柿葺に座せば冬日の差しにけり

菰卷の松に日の差す横に立つ

玄冬や近江の旅を懐しみ

寒風に足軽やかな山の道

膨らむをじつと待ちたる梅と我

剪定の鉄の置かれ昼休み

雲雀

寄り添いて迷いて春の純喫茶

雪空に行くあてもない二人かな

氷柱にて身体測定してみれば

雪荒れてホーム溢れておちちゃんと

警備員イングリッシュと雪解風

雪解の観光小股の細い列

冴え返る道は一人で歩くもの

薄氷を割って進むスートケース

百人の一年生の雪達磨

銅像の指差す全て深雪晴

ふじ女

退院の子と山茶花に触れにけり

退院を見送る子らに冬日差す

一枚の葉の落ち裸木となれり

爆ずる音高嶺へ届きどんど焼

佗助のはんの一輪咲けば良し

松の葉のあひだあひだの雪光る

寒木瓜の朱はルージュより更に濃し

寒椿右に左に向いて咲く

春近き一番ホーム風抜くる

目を閉じて風に梅の香嗅いでをり

松田裕子

月に二度訪ふ義母の家実南天

雨垂に打たれて揺るる冬薔薇

波の間を近づいてくる番鴨

二校舎を繋ぐ廊下の訝返る

星のなき夜に降る雪の粒大き

春曙山に光れる電波塔

宵星と共に滲んで春の月

軽トラのゆるゆる進む春の泥

春泥の河原をバイク走りたる

石垣に咲く迎春花見上げたり

村上正人

一羽癸ち続く一羽の尉鶺鴒

風や江波行き電車あと五分

境内の鳩舞ひ上がる初御空

平服の一人混じりて成人式

病院は面会謝絶雪催

佗助や風呂を入れつつ一人酒

枝越しの空の青さよ冬木の芽

玻璃越しに今朝の雪間を確かむる

玻璃越しの日差まなこに朝寝かな

目白来よ庭木に蜜柑二つ挿し

森口良樹

冬入日翼の灯り遠くなり

落葉松の光る樹氷や空青く

目を凝らしそれぞれ違ふ冬木かな

炬燵にてひとりのチエスの夜が更くる

冬菟摘む指先の冷えてをり

早春や人に驚き鳥の飛ぶ

芽吹く時野良に槌打つ人の影

巡礼の道の布袋に梅の咲く

如月や眼鏡頼みに毛鉤巻き

秋楡

掃き寄せし落葉ちりぢり風走る

白波の崩れつ寄せ寒気入る

寒鴉飛び立たぬままだの暮るる

若水を飲んでエブロン姿かな

臘梅を一枝挿して推敲す

せせらぎの音聞いてゐる春隣

前山に白雲湧いて春隣

真夜中の柱時計の牙え返る

休暇取り息子加はる野焼かな

山野ウタ

整然と裸木ならぶハイウェイ

人氣なき庭園に雪しまきけり

山際の近道ゆけば笹子鳴く

ものの芽や母の歩みはゆつくりと

梅の里丘の上まで香りけり

梅の花市場のバケツに束ねられ

白梅の二本束ねて届きたる

大原良子

昼食は母のおむすび広島菜

雨の日の葱じつくりと焼いてをり

冬の日の原爆ドーム手を合はす

初鏡グレーヘアの三年目

初鏡口角上げて笑ひ顔

風邪声で吾子は電球替へてをり

冬晴やマラソンファンと盛り上がり

土肥律子

鶺鴒来て山茶花の垣抜けて行く

新年やぜんざいを手に話し込み

風系をぎゅつと握つて見上ぐる子

五六羽で地面つえばむ冬雀

臘梅の香りに見れば日の差して

歩を止めて冬芽を仰ぎ見る晴天

水仙の咲けりと聞いて灯台へ

なつ

ガラス戸の凍てつく庫裏の廊下かな

雪深きポストの赤さ人氣なく

せめてもと外の柱の雪をとる

雪のなか空き家解く人昼の飯

久々に体操にゆく深雪晴

朝日差し田んぼの雪も息してる

紀英子

空缶を突つき続け初鵝

御降に傘をささずに駆け出す子

号砲に始まる町のとんどかな

遮断機の向うも大根提げてをり

成人式拳を膝にピアスの子

銅像を見上ぐる先に寒の星

高梨英子

春立つや切り株に手を触れてみる

寄せ植ゑにこんもり積る春の雪

二階より隣の梅を眺めたり

お遊戯を終へて駆くる子二月かな

八の字に水脈広がりて春の川

春の風邪飴しのばせて歌舞伎座へ

撫子

枯木立鳥の羽音の聞こえる

母の衣に袖を通して初稽古

満開の臘梅に人歩み寄る

日溜りに次から次へ寒雀

見上げたる梅の蕾の光の空

美耶

二階より初日を見つめ手を合はす

二年目に臘梅の花咲きにけり

雪道を転ばぬやうに歩きけり

庭の梅日ごと日ごとに賑らんで

河原静子

カフエテラス母と並びて春日受く

日を受けて春すすみつ老い深む

春の日の南都に巡る仏かな

あまたある太鼓の螺子や春の夜

桑門わかこ

ゲレンデを滑る姉妹に昼の月

屠蘇に酔ひ笑ひ上戸の姉妹

逝く母の薄き頬紅室の花

芭蕉句碑に会へり浅草寒詣

高嶋絹代

海ながめ食べて浴して春来る

如月の風吹く中に立ちにけり

木の芽晴ゆるりと鉄研ぎにけり

猫の恋眠れぬ夜に響きけり

やす保

冬うらら検査の後のカフェテラス

冬の朝友と二人で電車待つ

車窓から富士を連写の冬日和

粉雪の抱く子の頬に留まりぬ

山崎桂子

春の雪呉線のやや遅れたり

春空へ小鳥の群れて飛び出づる

残る鴨日は傾いて黒瀬川

上島康子

行く先に猪の足跡春の雪

浅春の厚き雲へと鴛舞へり

春浅し靴に詰めたる新聞紙

熊谷ゆり子

初雪や地を踏みしめて再検査

冬風の宮島街道市電乗り

寒暁や青から白に移りゆき

桜陽

ひよどりの甲高き声ひびきけり

梅林を渡る風かすかに香る

うららかや今日も軽やかに靴を履き

民

雪降りし車の下に猫籠る

湯気立ちてはつと一息冬の午後

臘梅がのびのびと道塞ぎをり

古川廣子

風吹く日都会の孫に牡蠣送る

小さき手で孫が真似して海苔炙る

花種を数粒蒔いて庭の隅

みさ子

令和七年一月度作品集より

綾乃 私の選んだ十句

これほどの紅葉の道はどこへゆく
枝豆に話し尽きぬも丹波かな
幼な子の大きな声の初電話
どこからの枯葉か庭へ三つ四つ
悲しさに冬の椿の咲き始む
だんだんと雪深くなる家路かな
山眠る母の家までまだ遠き
諏訪湖より雪の富士見る頃がよし
乳匂ふ赤子のくしやみする度に
老いし母睨ある子の手撫でやれり

佐保光俊
高尾ひとみ
あざみ
井藤希
大畑恵
暁子
ちどり
辻純江
松田裕子
村上正人

松田裕子 私の選んだ十句

城の濠渡るとき止む時雨かな
川べりを辿り冬木の桜かな
若水の志学の指にこぼれけり
宝塔を束の間照らし冬日落つ
北風の止まぬまま峡暮れにけり
寒いねと夫の両手のティーカップ
寒林に一つ二つと灯り点く
山茶花の一輪を持ち見舞ひけり
初詣あれこれ思ひ坂上る
二回目も末吉と出て冬日和

佐保光俊
高尾ひとみ
綾乃
井藤希
暁子
すみれ
知佳子
辻純江
雲雀
土肥律子